

2022年1月2日 佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書2章1～12節

説教題：神からは近い

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。皆様のこの1年が、豊かに祝福されますように、心よりお祈り申し上げます。

年末に、ある心理学者のこんな言葉を知りました。「私たちの幸福感は、自分の心が何とつぶやいているかよりも、自分の心に何を語りかけるかによって保たれる」。なるほど、と思いました。心から出て来る呟きと、信仰による自分自身への語りかけは、違うと思います。三浦綾子文学館の森下先生の話には、「泥流地帯」の中の言葉「人間の思い通りにならないところに、何か神の深いお考えがある…」、この言葉を自分に語り続けて、祝福を経験した人の話が出てきます。「夢だけが叶う」と言った先生もおられます。新しい年、自分の心に信仰による希望のメッセージを語りながら歩んで行きたい、と願うことです。

さて、教会暦では降誕節(クリスマス)を12月25日から1月6日までとして、1月6日が「東の博士達がイエス様を礼拝した日」となっています。(ところで、1月1日は元旦ですが、教会暦では何の日だと思われるのでしょうか。クリスマスに関係があるのですが…。「イエスの割礼、そして名前が付けられた日」とされています)。話を戻します。1月6日が「博士達がイエス様を礼拝した日」となっていますので、今年も1月最初のこの礼拝では、「博士達の来訪」の箇所を学びたいと思います。私は、この箇所からお分ちしたい恵みも示されております。「クリスマス物語」に必ず登場する「東方の博士達」ですが、彼らの記事は何を語るのでしょうか。

## 1. 「博士達の来訪」の意味

イエス様が生まれてしばらく経った頃、東方から博士達がエルサレムにやって来て「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか…東の方でその方の星を見たので、拝みにまいりました」(2)と言いました。彼らは何者なのでしょう。なぜ「ユダヤ人の王」が生まれたというのに、異邦人であるだろう彼らが拝みに来たのでしょうか。「東の方」というのは「ユダヤから見て東の方」ということで、かつてバビロンやペルシャがあった地域です。「新共同訳」は、彼らを「占星術の学者達」と訳しています。彼らは天文学の先生であり、星占いの先生であり、呪い師であり、祭司でもあり…そういう人達だったと思われまふ。ある学者は、「はるか昔に没落した王の種族であったのではないか」とも言っています。後には「この3人は、当時の世界を代表する地域の王であった」という伝説も生まれますが、それは聖書の言っていることではありません。「東の方」に戻りますが、例えばバビロンは、イエス誕生の600年前、ユダ国の主だった人々が捕囚民として連れて行かれた地です。バビロンでユダヤ人は惨めな捕囚民でしたが、彼らの信仰はバビロンの人々(後のペルシャの人々)にも影響を与えて行ったと思われまふ。「旧約ダニエル書」に「ダニエルの知恵に驚いたバビロンの王様がダニエルを『バビロンのすべての知者たちをつかさどる長官』(ダニエル2:48)にした」という記事があります。今でいえば文科大臣にしたということです。ダニエルの信仰はバビロンの人々に影響を与えて行ったはず。聖書が預言する救い主はユダヤ人だけではない、世界の人々に救いを与える救い主でした。「そのような救い主がやがて現れる」という希望は、代々の東方の人々の心も捕らえて行ったと思われまふ。

この博士達は占いをしていた人です。多くの人々が救いを求めて訪ねて来たでしょう。しかし、彼らの占いには、何の救いも、確かな希望もない、ということを知っていたのが、彼らだったのではないのでしょうか。尼僧からキリスト教の伝道師になった方が言っておられます。「仏教が人間が行き着いた最高の哲学であることは分かる。でも求めているものはなかった…神に向かって祈る、神と交わる世界がなかった」。ある本にはこんな話がありました。その先生の教会に1人の女性が訪

ねて来て言いました。「取り返しのつかないことをしました」。先生は「取り返しのつかないこと」の内容を聞いて何か助言して上げようと思いました。しかし女性は立ち去ってしまうのです。先生は言っています。「あの日、彼女は、何者かの前に立ちたかったのです…彼女の深みに共にいる方をなぜ示すことができなかつたのか…どんな人間の絶望よりもさらに深い神の恩寵の光の中に共に立って、なぜ祈れなかつたのか、と思います」。この話も教えます。人には、神と交わる世界が必要なのではないのでしょうか。神に祈る、神に助けを、導きを期待する、そういう世界がなければ、真の光は見えないのです。彼らも、人の世の闇を見ながら、そこに光をもたらすことが出来ない自分達を痛感していたのではないのでしょうか。あるいは、ある神父さんは「なぜ神父になったのか」と聞かれて「本当に人を救うことの出来る本物に繋がり、その本物にひれ伏したかった」と言いました。博士達も本当に人を、自分達を救ってくれる、本物の神に繋がることを求めたのではないのでしょうか。しかし、どうすれば本物の神に出会い、繋がることができるのでしょうか。星野富弘さんがこんな詩を書いています。「遠くて見えないのですか。近すぎて見えないのですか。小さくて見えないのですか。大きすぎて見えないのですか。どうしたら、どこへ行ったら、あなたに逢えますか」(星野富弘)。こういう心境だったのかなと思うのです。だから「ユダヤに生まれる」と言われる「救い主」に、「本物」に、望みを掛けたのではないのでしょうか。

彼らは、天文学の専門家です。星の動きに異変が起こった時、それが「神が特別なことを告げるしるしだ」ということが分かったのです。「救い主の誕生」と星との関連は「旧約」にも「ヤコブから一つの星が上り…」(民数記 24:17)と預言されています。だから、ついに「救い主」が生まれることを確信して、「救い主」を訪ねて、はるばるユダヤにやって来たのです。

彼らは「王が生まれるなら、首都の王宮だろう」と考えたと思うのです。エルサレムに行きます。そして人々に聞いて回ります。それがヘロデの耳に入りました。ヘロデは「ユダヤ人の王」と聞いて、自分の地位が脅かされることを恐れました。だから博士達に捜し出してもらって、その子を殺すために、祭司長や学者達に問うて得た情報を博士達に与えました。こうして博士達は、教えられた通りベツレヘムに行くのです。

9～10節「すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ」(2:9～10)。ついに星が止まったのです。ついに救い主に見えるのです。彼らは「この上もなく喜」(10)びました。そして「ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた」(11)のです。「黄金は王への捧げもの、乳香は祭司への捧げもの、没薬は死者への捧げもの」と言われます。それは真の王であり、人と神を執り成す祭司であり、死ぬことによって救いを成し遂げるイエス様の生涯を表す贈り物でした。博士達は、イエス様がそういう救い主であることを、何か理解していたのかも知れません。しかしそれ以上に、ある本には、「宝の箱」というのは「彼らにとって大切な星占い師の商売道具が入っていた箱だった」と説明されていました。もしそうなら、それをイエス様に捧げてしまったということは—(彼らは、神が占いや呪いを嫌われることを知っていたはずです。「旧約聖書」に何度も書かれています。しかし、それを捨てられなかつた。でも彼らは)—救い主に見えることができた、その喜びの中で、喜びを打ち消すようなもの、神の御心にそぐわないものを捨ててしまいました。そしてそこから、彼らは神に近づく別の生き方、新しい生き方を始めるのです。それは12節「別の道から自分の国へ帰って行った」(12)の言葉にも暗示されています。

## 2. 「博士達の来訪」のメッセージ

この物語は、私達に何を語るのでしょうか。2つのことを申し上げます。

### 1) 神の選びの恵み

「マタイ福音書」では、異邦人で、しかも占い師であった彼らが最初にイエス様に礼拝を捧げる

のです。そのことは「神の選びの不思議」を語るのではないのでしょうか。彼らが星の運行に詳しくあったこと、救いを求めていたということを申し上げました。しかし、そんな人達は沢山いたでしょう。しかし彼らだけが、神の招きに応じて、立ち上がってやって来たのです。なぜ、彼らはそうしたのか。それは、最終的には神の選びによることだったと思います。神に選ばれたから応答したのです。しかし、ではなぜ、神は彼らを選ばれたのでしょうか。聖書にこうあります。「あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです」(1 コリント 1:26～29)。なぜ、彼らを選ばれたのか。それは、彼らが神の民ではない、異邦人であり、しかも占い師だったからだと思うのです。ユダヤ人にとって異邦人は神の救いから漏れるべき人々でした。しかも、申し上げた通り、「占い」は神が嫌われることです。彼らは神に選ばれるに相応しい人達ではなかった、御前に誇るべきものは何1つ持っていなかった、しかし、だからこそ選ばれたのではないのでしょうか。だからこそ、イエスにお会いしたとき、そんな自分達に神が目を留めて下さり、今、救い主に見える、それを思っ喜びに溢れたのではないのでしょうか。

そのことは私達も同じです。お1人びとり、教会にお出でになる切っ掛け、理由は、色々とあらわれるでしょう。それは自分で決めたことのように思っても、決してそれだけではないのです。最後は神の選びです。あなたは神に選ばれなされたから、神の招きに応じてイエス様の前に出られるのです。もし、みなさんが「私は選ばれるような者ではない」と思われるなら、だからこそ神は選ばれたのです。大塚久雄という経済学者が、自分は何を支えに生きて来たか、講演の中でこう言いました。「『自分は無きに等しい者であって、その自分を神は選んで下さった』、そのことを支えにやって来た」。「私が神様を選んだのではない。神様が私を選ばれたのだ」という事実は、私達の歩みを支えるのです。ある教会である方が洗礼を受けられた時、牧師が「あなたがキリスト教の神様を選んだのではなく、神様があなたを選ばれたのですよ」と話したら、その姉妹は「自分が選んだのではなくて、神様が自分を選んでくださったのですか。ありがたいことですね。本当にありがたい」、そう言って涙を流されたそうです。私達は、選ばれた恵みを、それが当たり前になってしまっ、忘れてしまう時があるのではないのでしょうか。しかし、神に選ばれ、神を「私の主」として持ち、神に礼拝を捧げ、御手の中で神に希望を持って生きることができ、それは大きな恵みではないのでしょうか。

それは、こうも表現できます。イエスは、ある時、こう言われました。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のために…いつまでも…放っておかれることがあるのでしょうか」(ルカ 18:7)。「選ばれた民の祈りに、神は必ず答えて下さる」という言葉です。神によって選ばれているという事実があるから、選ばれた者の祈りだから、神は聞いて下さる、それが私達の祈りの根拠です。ある牧師が言いました。「私達がたとえどんな困難な所に立っているにしても、祈ることができる限り、道は必ず前に開けるのです」。いずれにしても、この個所は、選びの恵みを語ります。選ばれたという事実を感謝し、大切にしていきたい。

## 2) 選ばれた者ゆえの神の近さ

博士達は、神から遠いところにいた、しかしだからこそ、神に選ばれ、選ばれたことを感謝して、2000km の距離をやって来た、と申し上げました。しかし、それは、信仰を持つ時のことだけではないと思います。

昨年1月、私は「今年は神様に少しでも近づくこと」を目標として掲げました。ところが「クリ

スマス礼拝」でも申し上げたように、鬱状態になってしまって、その中で大変な不信仰に陥ってしまったのです。病気のせい、と言えばそうなのでしょうが、神様への信頼、神様への感謝、それをどこかに失ってしまった状態でした。神様に近づくどころか、むしろ神様から離れてしまった感じでした。皆さんは、自分の信仰が神様から遠くなってしまうのを感じることはないでしょうか。その時、私達は、あるべきところのない自分を責めるような、そういう辛さに陥るのではないのでしょうか。

しかし、この物語は教えるのです。神から遠いところにいた博士達のところに神の方から手を伸ばして下さったのです。そして、彼らを導いて行かれたのです。もし私達が、自分は神から遠いところにいるように感じる事があったとしても、その遠さは、神様には何の問題もないのです。だから神の方から私達の方に来て下さるのです。そうやって私達は、自分の信仰の弱さを神様に支えられ、神様に導かれ、信仰生活を続けて行けるのです。2000km、しかし天地万物の支配者であられる神様には、ものの数ではない、私達の神様からの遠さは、ものの数ではないのです。神様の恵みは、私達の弱さ、神様からの遠さを、遥かに超えて大きいのです。今日、私は、そのことを一番申し上げたかったのです。そして、その神様への信頼を篤くして、全てを委ねて、新しい年を歩み始めたいと願うことです。

## 最後に

最後になりますが、博士達は2000kmの道のりをやって来ました。そして神様は、見事に博士達をイエス様に引き合わせて下さいました。博士達の求道に応えて下さったのです。聖書は言います。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます」(ヤコブ 4:8)。

新しい年が始まりました。私は、懲りずに今年も「少しでも神様に近づく年でありたい」という目標を掲げました。皆さんは、どのような求道の1年を過ごされるでしょうか。皆さんの求道の御歩みに、神様が豊かに応えて下さいますように、祝福をお祈り致します。